

## 第49回 JLEM 講演「JLEM 25年の歩みを振り返って」

加納 千恵子（筑波大学）

日本語教育方法研究会（JLEM）が1993年9月23日に筑波で産声をあげてから、はやいもので四半世紀になります。来年25周年を迎えるにあたり、研究会誕生の地である筑波で第49回研究会を開催することができたのは誠にうれしく、衣川会長はじめ、運営委員の先生方に感謝申し上げます。25年を振り返って何か話すようにというお話をいただいた時は、私以外にもっと適任の方がいらっしゃるだろうと思ったのですが、私も来年3月で定年を迎える歳になってしまったことに気づき、元気でいるうちに思い出話でもさせていただけようと、お引き受けすることにしました。

せっかくの機会なので、筑波大学における日本語教育の歴史と JLEM との関係に触れたいと思います。筑波大学の日本語教育にはお二人のキーパーソンがいらっしゃったように思います。お一人は寺村秀夫先生です。筑波大学は1973年にこの地で開学し、1979年には私の出身大学院でもある地域研究研究科（現在の人文社会科学研究所国際地域研究専攻）において「日本語教師養成プログラム」が始まりました。1980年に寺村先生が大阪外大から筑波にいらして、1983年に『日本語表現文型 中級 I・II』が刊行されました。そして1984年に、留学生センターの前身であった留学生教育センターと、国立大学初の学部レベルの日本語教師養成課程である日本語・日本文化学類ができ、関西に戻られた寺村先生と入れ

### 筑波大学の日本語教育とJLEM 25年の歩み

1973(S48)年 筑波大学開学

1979年 筑波大学大学院修士課程地域研究研究科

「日本語教師養成プログラム」開始

1983年 寺村秀夫ほか『日本語表現文型中級 I・II』

1984年 留学生教育センター、日本語・日本文化学類

1984年10月 国費留学生のための日本語予備教育開始

1985年 大坪一夫先生 筑波大へ

1991年 留学生センターに改組、大坪一夫ほか24人

『Situational Functional Japanese』

1993年3月 大坪一夫先生 東北大へ

1993年9月 第1回日本語教育方法研究会

於：筑波大学 大学会館

初代会長：内島俊雄センター長



替わるように、お二人目のキーパーソンである大坪一夫先生が名大から筑波にいらっしゃいました。筑波では1984年10月に大使館推薦の国費留学生のための日本語集中予備教育を開始しましたが、当時初級の教科書がなかったので、大坪先生を中心に非常勤講師24名が初級の教科書『NSF』、のちの『Situational Functional Japanese (SFJ)』を作ることになりました。その時、大坪先生はすでに名大で初級教科書をお作りになっていたにもかかわらず、筑波の初級教科書を作るに当たって私たちに何も指図めいたことはおっしゃらず、「失敗を恐れず思った通りに作りなさい」と私たちに励ましてくださったことが忘れられません。1991年～92年にSFJを世に出し、私を含め何人かを専任講師にした後、大坪先生が東北大に移ると告げられた時のショックは大変なものでした。でも、「この国に日本語教育をしっかりと根付かせるためには国立大学を3つぐらい変えないとイン

パクトがない。定年の歳を考えると、一箇所に7年ずつしかいられないんだ。」という大坪先生の言い分を受け入れ、その代わりというような意味合いもあって、研究会を立ち上げることになりました。

留学生センター長であった物質工学の内島先生に会長をお願いし、当時助手だった山元さんを中心にオール筑波で事務局を務め、初めは大坪ファミリーのような研究会でした。第1回研究会のプログラムの目次を見返すと、東北大学に移られた大坪先生の基調講演があり、当時はまだ珍しかった「ポスターディスカッション」（発表件数15件！）が言語編と教育編に分かれており、いろいろなお縁で筑波を訪れてくださっていた先生方が講評してくださって、なつかしさとともに、現在の研究会の盛況ぶり（会員数600名余、第49回の発表件数55件）を考えると、感慨深いものがあります。大坪先生は、本田宗一郎の技術

革新に感銘を受け、ホンダの車が大好きで、その影響もあってか、日本語教育にコンピュータの利用や教育工学的アプローチを取り入れるという先見の明が研究の方向付けの随所に見られました。当時の学会ではまだ言語の理論的研究が重視され、それを教育に応用するという立場が優勢であったのに対して、教育現場から理論研究へのフィードバックの重要性を説き、ただその場合、教育の経験だけに基づいてものを言うのではダメで、教育実践のデータを科学的・実証的に調査・研究するところから理論研究にフィードバックすることが教育の質の向上に繋がるという強い信念を持っていらっしやったように思われます。また、JLEMのホームページで、第1回から来年の第50回に至るまでの研究会開催場所の一覧を見ることができますが、高校や地方の国際交流センター、生涯学習センターなど、大学以外のところでの開催に力を入れていたことが分かります。

JLEMの特色としては、教育現場を重視すること、言語の理論的研究ばかりでなく実践研究を重視すること、科学的・実証的な研究方法、データに基づいた研究を重視すること、ポスター発表というディスカッションによる研究の深化のプロセスを重視すること、日本語教育の多様性を大切にし、上下関係のない横並びの関係の研究会であること等が挙げられると思います。2代目会長のカイザー先生をはじめ、歴代の会長が自ら率先して会場づくりや後片付けをしていたのも印象的でした。今では当たり前のことかもしれませんが、当時の日本語教育界ではかなり画期的なことだったので

### JLEM 25年の歩み

1993年9月23日 第1回日本語教育方法研究会

10:00 開会あいさつ 内島俊雄 留学生センター長

会の進め方 市川保子（筑波大学）

<午前の部> 10:10~12:20 発表A・ポスターディスカッションA  
(言語編 7件)

<午後の部> 13:30 基調講演 大坪一夫（東北大）

14:30~16:40 発表B・ポスターディスカッションB  
(教育編 8件)

16:40 全体講評 木村捨雄（鳴門教育大）

アルド・トリーニ（パビア大）

カイ・ゲーネツ（ボン大）

リチャード・ハリソン（スターリン大）

<総会> 17:00~17:30

はないでしょうか。私自身、この歳になるまで、この研究会によって多くのことを学びました。1人では難しいことでも、みんなで力を合わせればできることがあること、教師が成長するためには厳しいピア評価が大切であること、そして何より大坪先生から教えていただいたのは、失敗を恐れず失敗から学ぶということでした。

最後に、JLEMの今後に向けて、若い皆さんに何か望むことをとということでしたので、年寄りから一言申し上げたいと思います。それは、JLEMは権威ある学会を目指すのではなく、教育現場に根ざし、みんなで盛り上げる手作りの研究会であり続けてほしいということです。私自身がこの研究会で学び、育ててもらったように、今後も多くの若い研究、若い研究者（教育者）を育てる場であってほしいと切に望みます。筑波大学のキャンパスは以前とそれほど変わっていないと思いますが、つくばエクスプレスの開通により都心から近くなり、便利になりました。また、我々の教育機関も、名称が留学生センターからグローバルコミュニケーション教育センター（CEGLOC）へと変わり、留学生への日本語教育が日本人学生への外国語教育や国語教育と同列に扱われるようになってきています。今後さらに、職業教育や年少者教育など、新しい多文化共生の時代の課題と取り組んでいくために、JLEMの役割がますます重要になっていくと思いますが、会が大きくなってもその良さを失わないように、仲間との絆を大切にす研究会であり続けてください。

ご清聴ありがとうございました。

